

2010 携帯する防災用品

Carry-All Emergency Tools and Supplies

AD10 國保 優子
指導教員 谷上 欣也

1. 研究目的

一昨年発生した東日本大震災後、人々の防災に対する意識は高まっている。しかし、都心に住む20代女性の防災意識は低く、いざという時の備えは充分ではない。

本研究では都心に住む20代女性の防災意識向上を目的に普段から持ち運べる防災用品の提案を行う。

2. 調査と分析

20代女性の防災意識の低い理由と防災への備えについて調査した。

首都直下型の大地震が起こった場合、新宿等の都心部での被災者数は1565万人と予想されている。この予想から、市町村単位では防災用品の備蓄が進んでおり、食料や毛布などは確保されている。また、人々の意識向上により、家庭での防災用品の設置も多い。一方で20代女性が必要とする衛生用品等が軽視され、不十分であるという意見もあげられている。

実家暮らしの女性は基本的に親が防災用品を管理しているため、防災意識が低いことが分かった。また、一人暮らしの女性は根本的に関心がないという人が多い。

家庭では防災用品を準備していても、外出時に携帯したり、職場で準備している人はほとんどいなかった。これらのことから、外出時に携帯できる防災用品の必要性を感じた。

3. コンセプトの立案

『「いつか」をいつも持ち運ぶ』

- ◆ 毎日、防災用品を持ち歩くことで防災意識の向上をはかる。
- ◆ 常に携帯することで外出先で被災した場合でも対応できる。

4. デザイン展開

多くの20代女性は常にサブバッグを持ち歩いていることに着目し、防災用品を組み合わせることで、常に持ち歩けるものを目指す。サブバッグは、お洒落の一貫とされているため、外観で防災用品と解るデザインは避け、防災用品を内側に収めた。サブバッグのサイズは、300×200×100とし、既存品の物に比べると少し大きめにした。これにより500mlのペットボトルを立てて収納することができる。バツ

クの底部には200×130×60の取り外し可能な防災用ポーチを配置した。このサイズは防災用品が無理なく収まる容量である。防災用品は、衛生用品を主とし、化粧水、オールインワンジェル、生理用品、ウェットティッシュ、歯ブラシ、マスク、ブラシ、防寒シート、小型手動充電式懐中電灯が収納されている。避難所内では防災用品が入っているポーチに貴重品を入れ替えてショルダーバッグとして使用できる。耐水性の生地を使用し、汚れにくく、長く使用できるようにした。また、ポーチ上部を厚手素材にし、上に荷物を置いても安定出来るものにした。サブバッグの素材は既存品と同様の生地にした。サブバッグ自体も取っ手の長さを調整でき、避難時には斜めがけバックとして使用できるようにした。

5. 完成図



6. 結論

検証の結果、日常での使用において不便が無く、外観からは普通のサブバッグと変わらないのでいつも使用ができる。自分で防災用品を組み合わせる事ができるので、防災に対する興味が湧いたという意見があった。また、普段身につける事で安心感があるという意見もあった。一方でリュックサックのように側面からの取り出しを可能にした方が良い、お洒落感の演出がもっと欲しいといった意見もあった。しかし、いつでも持ち運ぶ事が出来るという携帯性に関する事や、常に持ち歩くことで防災意識の向上が謀れるといった点は、概ね達成できた。今回の結果から、アレンジ性等の改善や生地を検討の余地がある。もっと幅広くユーザーが使用できるサブバッグの検討が必要だと感じた。

文献

[1]『美肌総合研究』

<http://www.ci-labo.jp/skin-care/4/> 2012.06